

---

# 俺はあいつの義理の兄。

雪野 ウサギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺はあいつの義理の兄。

### 【コード】

N3305V

### 【作者名】

雪野 ウサギ

### 【あらすじ】

俺ってば義理の兄としてあいつの兄になってしまったよ。

これから何をどうしろと？

自分でかんがえる？ はい、自分で考えます。

まあ、とりあえず、はっちゃけていきますか！

## 1話 俺が再び生まれた日（前書き）

皆さんお久しぶりです。

はじめましての方ははじめまして。

私のかかえる2作品「サクラ大戦」と「天地無用」ですが大部分のプロットがロストしてしまったのでただいま書き直し中です。

もうしばらく更新の方お待ちください。

それとってはなんですすが気晴らしにハリポタ物を書かせていただきます。

目標としては賢者の石までを考えていますが、この作品は完全に暇つぶしで書いているため、プロットも用意しておりません。

なので更新はあまり期待しないでください。

それでもいいと言う方読んでくだされば嬉しく思います。

## 1話 俺が再び生まれた日

俺は何故か赤ん坊になっていた。

ベビーベットの横にある姿鏡にうつる自分を確認したから間違いはないはずだ。

しかも、何故か俺の母と共にみた自分のアルバムにあった赤ちゃん時代の姿と全く同じ姿で、今僕は、ベビーベットの上で、白くフリフリついた洋服に包まれてそこにいたのだ。

一体どういう事なんでしょう？

今流行のテンプレ的展開でしょうか？

生まれ変わってしまったのでしょうか？

いやこの場合、頭はおとな体は赤ちゃんのてんかいですからしかも自分が幼い時とおなじ姿、これは、逆行してしまったのでしょうか。

きつと俺のお母さんがお腹が空いたと泣き声を盛大に上げればきてくれるでしょう。

だから俺の心の安定のために母よ来て下さい。

「おぎぎゃ あおぎぎゃ あおぎぎゃ あおぎぎゃ あおぎぎゃ あ

俺こと、愛手アイテ 学マナブは盛大に泣きました。

すると、ほらお母さんが来ましたよ。

さあ、おっばいプリーズ。

「・・・・・・・・。」

すいません。

この人、返品していいですか？

この乳はなーうちの母ちゃんのじゃねーだよ。

家のはなー、巨乳で、バインバインでこんな貧乳じゃねーんだよ。

ハイ、皆さんわかりますね。

俺もわかります。

俺はどうやら誘拐されたようです。

参ったなーそんなこと俺の両親から聞いたことなかったのだけど、

小さい時にそんなデンジャラスな事件に巻き込まれていたのか、は、  
は、は

と、思いながら吸いたくないけどおなかがすいたのでしょうがなく  
貧乳を吸いながら、誘拐犯？な女をみた。

その姿に俺は度肝を抜かれた。

は？茶髪？茶色の瞳？なにそれ鼻高いのですけど。

俺は日本人なんですけど大丈夫ですか？

いいやだいいじよばない。ひじょーにだいいじよばない。

だれだよーこの美人さんはよー。俺は海外まで輸出されたのか？

そんな疑惑のもと、ちっぱいの先端を不機嫌に転がしていたら、この姉さん俺の頭を優しくなでるところいったんだ。

「あなたの名前が今日やっとお父さんと相談して決まったの、貰ってくれる？

一生懸命あなたを愛して育てると決めたから。私のことお母さんってよんでよね？

あなたの名前はアテム・グレンジャー

グレンジャー家の長男よ。」

はい？俺はどうしてあなたを母といわなければならないのでしょうか？  
父さん？ああそつだ俺の父さんは正常かもしれない。

さあ、あのムツチヨメンをだすんだよー。（ムツシヨメン＝筋肉いっぱいのイケメン）

そう俺の心の叫びが通じたのか父親らしき男が出てきた。

そう、出てきたのはいいのだが、ああ、ああ、俺の希望は死んだ。  
死んだんだよー。

まあ、この状態と状況で僕の父さんが出てきたら、一週間ぐらい不

眠不休で問い詰めて母さんとの関係をOHANASSIしようと思  
ったけれど、そうならなくてよかったと思うべきか、  
自分の親に会えなかったことに悲しむべきか、はあ、どうしようか  
だって、目の前の生き物イケメンでこれまた外国人なんだもの  
一体どないせーいうんだー。

ん？なにか二人が言っていますね聞いてみましょう。  
なにになに

「ねえこの子は僕達を受け入れてくれるかな？」

「それは、私たち次第だと思いますよ。おとうさん」

「そうだね、この子が家の目の前に捨ててある時は驚いたけど、も  
うこの子は僕らの子供、精一杯お腹にいる子どもと一緒に愛してあ  
げよう」

「そうね、そうしましょう。ふふ、もうあなたはお兄さんになるの  
よ。頑張ってるね」

はい、はい、がんばります。じゃねーって俺孤児なんですか？

おい、俺の父さんと母さんはどこ行ったー。

なんなんだよー俺の名前がアテム・グレンジャーって、ん？

ぐれんじゃー？グ・レ・ン・ジャー？

聞いたことがあるような？

まあいいか、なんとか生活してみますかね。

それがこの世界で意識を目覚めさせたときの俺の思考だったんだ。

それからときは流れ俺は一歳になり、ついにもう一人の子どもが生まれた、

その名も、ああ、ぼくはこの名前を聞いたとき思わず小便を漏らして泣き出してしまったよ。

なさない。

だって、その子の名前がハーマイオニー・グレンジャーって言うんだもの。

俺はこれからどうすればいいんですか？

教えてくれよドラえもん。

ああ、結局、逆行にくわえてトリップというこの結論

もう、ほんとうすんの……………。

つづいぐう？



## 1話 俺が再び生まれた日（後書き）

ここまで読んで下さり有難うございます。  
よければ評価してくださいとうれしいです。

話は変わりますが、連載としようと思ったのに設定が短編になっていました。

改めて連載という形でスタートしたいと思います。

短編表示になっているものは消去したいと思いましたが、運営さんの方針にしたがい、残すことにしました。

読むとき混乱するといけないと思い、題名に（短編）と付けておくことにします。では、申し訳ありませんがご了承ください。

## 2話 妹の髪の毛(前書き)

皆さん評価、有難うございます。

創作の励みになります。

では二話目のお話しをお楽しみください。

## 2話 妹の髪の毛

皆さんこんにちは、ただいま俺は三歳になり、義理の妹のハーマイオニー・グレンジャーは二歳になりました。

なんかこの家族と暮らして3年とちょっと立ちましたけれど俺の方は魔力とかそんなもの、かけらも感じる事ができません。

絶望した！私は絶望した！

だって、二歳のこの妹はなんかありそうな力がすでにあるんですよ！

それはなにか教えてあげましょう。

それに気づいたのは数日前のことでした。

ただいま、ハーマイオニーとともにベビーベットでおやすみの最中です。

そして何故か俺の右手に妹の髪の毛が絡まっているんです。

それはもう毎日毎日、うっつと惜しくなるほど。

一緒に寝ると気づいたら巻き付いているんです。

それはもう、「離さないんだからね！」「とかいっちゃ女の子を彷彿とさせます。

と、これだけ言えば可愛いじゃないかとか言えるのでしょうか、

この状態、地味に痛いのです。

だって、ぎゅって細い糸で縛られているような感触が襲ってくるんだもん。

だから、俺は涙ながらに訴えます。

「いーちゃーいー」

その時騒ぎを聞きつけて母親？がやって来ました。

「あらあらまた、ハーマイオニーの髪の毛にいたずらしちゃったの？」

もう、め！ですからね。」

「うー」

「うーじゃありません！だめ、いけないことよ。」

「俺じゃないのにー」

ああ、また信じてくれません。

皆さんは信じてくれますよね？

俺は本当に何もやっていないんです。

気づいたらいつもいつも巻き付いているんです。どうしててじャー

もうわかりました。絶対に決定的瞬間をとらえ、俺じゃないことを証明してみせます。

俺はこの時今日一日寝ないことを覚悟しました。

そして、ハーマイオニーが、貧乳を吸っている時も自分が糞不味い離乳食を食べている時も片時も離れずハーマイオニーを観察することにしました。

俺の右手に襲ってきたら真っ先に親？に報告するんだと決めて、

「ねえ、アイン？そんなにハーマイオニーのこと見つめてどうしたの？」

「なんでもないです。」

「ねえなんで？」

「なんでもないです」

そんなやりとりが親子間で行われましたがそんなことはどーでもいいでしょう。

「ねえ、もう寝ないとアインちゃん」

「嫌です」

「ねえ」

「い・や」

俺は眠い眼をこすりつつ反抗の意思を伝えました。

今の俺の目は血走っていることでしょう。

そんな俺の態度に母はお冠です。

まあ、確かに目の前のハーマイオニーは母の貧乳を吸い終わり、満  
足したのかぐっすり寝ていますし、母としても俺を含めて早く寝て  
もらい自分の時間がきつと欲しかったりするのでしょう。

それに、小さい子は早く寝なければいけないのは確かですしね。

でも俺は、証拠を見つけねば、ずっと親にハーマイオニーの髪の毛  
が相当好きなのねーまたそんなからましちやっつてとか言われるのは  
ごめんです。

でも、そろそろ母の我慢の限界みたいです。

だって体がプルプルと震えているんですもん。

あー怒鳴られるまえにどうか証拠を親に見せられないものか、

ほら、ハーちゃん髪を絡めるんだよー

俺はそつと自分の右手をハーマイオニーの髪の毛に近づけました。

「こら、またハーマイオニーの髪にいたずらしようとする。そんな  
に好きなの？アテム」

それに気づいた母に俺は注意され、笑ってからかわれた。

それに俺は必死に言い返した。

「ち、ちがうよー。そりゃハーマイオニーは可愛いけど、俺はハーマイオニーの髪の毛にいたずらしてないことを証明したかったただだもん！」

そんな俺に対して母はなんとも納得したようにして頷くと、しょうがない子ねーと言って俺の頭をなでた。

なんか、色々とごまかされたような気がしてフクザツな気分である。

でもまあ、なんか頭なでられるのあつたかくて気持ちいいからいいかー

そうして俺は寝かしつけられた。

ハーマイオニーの力の証明をする計画がおじゃんになってしまったが、これはこれでいいのかもしれない。

そして朝起きると、また俺の右手にハーマイオニーの髪が絡まっていた。

でも、今度の絡まりはいつものひどいものではなくて、俺一人ですうにか出来るほどの絡まりぐわいあった。

まるで優しく手を握られているそんなやわらかい感触のものであった。

ったく、可愛いやつめ。

この時初めて俺の心に兄妹愛というものが芽吹いた。

せいぜい、兄妹してやるよ。ハーマイオニー。

そうして俺はまだ眠る妹のほっぺを優しくつついたのだった。

## 2話 妹の髪の毛（後書き）

ここまで読んで下さり有難うございます。

またよければ評価お願いします。

ではまた次回お会いしましょう。

### 3話 妹と過ごす一日

あー、テス、テス、ただ今人生の確認中。

私は生きていますか？

ハイ生きています。

ハーマイオニーはあなたの妹ですか？

はい、義妹です。

あなたは今何歳ですか？

六歳になりました。

ちなみにハーマイオニーは五歳です。

僕は小学生になりました。

はっきり言って学校がつまらないです。

授業が簡単すぎるんだじえー！。

まあ、それはともかく、小学校での俺の振る舞いなんてどうでもいいことでしょう。

今日はハーマイオニーとの日々の過ごし方について紹介しようと思います。

それは、朝目覚めた時から始まります。

今日は快晴、いい天気。

朝日が窓格子から差し込み薄いカーテンの生地を淡く照らし、少女の肢体を優しく照らすそんな朝。

アテムとハーマイオニーは目を覚ました。

「フア、よく寝た」

「おはようーお兄ちゃん。」

「おはよう。ハーちゃん」

俺と義妹はいつものように一緒にベッドからまだ眠い眼をこすりながら、起き上がった。

ちなみに、ベビーベットはもう、卒業。

今は大人でも使えるベットが子供部屋を占領中。

余談だけど、あともう少ししたら義妹と一緒に部屋ではなくなるそんな微妙な年頃になるのでしょうか。

それまではハーちゃんの体温を感じていませうかね？

い、言っておきますが、俺は変態じゃありません。

ただ、ハーマイオニーを抱きしめて寝るとすぐ寝付けるというだけなのです。

本当ですよ！

ただ、最近ハーマイオニーぶんがたりません。

一緒に寝てるのになぜかって？

それはね？

俺らがねているベットを見てくれればわかると思うよ。

ベットの上に散らばるのは本、本、本。

昨日母がバトンタッチと言って僕に預けたハーマイオニー用の本の  
大群、それが十数冊散らばっているのです。

絵本から、字がいつぱいな童話まで唯一の救いが何かしらの技法書  
がないところ。

この義妹さん、寝付かせるためにたくさんの本を読んであげないと、  
寝ないのである。

それはもう、冗談でもなく、本当にぐずりだして号泣するのである。

例えば……………。

「あ〜んぐ本〜」

と言いながら涙と鼻水を流し切々と訴える義妹。

ついには地団駄を踏み出して、部屋を転がり回るのだ。

かわいいんだか憎たらしいんだかわからない。

うるさくて眠れないよ。ハーちゃん。

でもまあ、彼女の本中毒のおかげで俺は文字の読み書きはこの年で完全にマスターした。

両親はそのことに感動してうちの息子は天才だと、ご近所さんに言いまわるほど。

ホントやめてください。

恥ずかしいですから。

ちなみにハーマイオニーはまだである。

ある程度は読み書きできるのだが、まだ筆跡が安定しないし、覚えている単語数も少ない。

普通の五歳児とはまあ、こんなものだろう。

でも、ものすごいことがある。

読み聞かせられたお気に入りの本の内容を一字一句間違えずに暗唱できるのである。

好きこそ物の上手なれとはこのことなのだろう。

きつと原作道理、勉強大好きっ子になるのだろうね。

まあ、それはともかく、何故読み書きを俺がマスターしてしまっほ  
ど妹のために本を読んであげなければならなかったか、謎だろう？

本当はこの役目は親がやるだろう普通？

だって、普通は、六歳で、本など読めても読めないだろう？

たどたとしく、えっちらおっちら、と老人のごとく、スロースピー  
ドで読むぐらいしかできないんじゃないか？

常識的に考えて。

でも、ここグレンジャー家では、そんな常識はなかった。

そう、母親の限界というものによって……………。

詳しい内容はいったほうがいい？

……………。

……………。

……………。

そうですね、しりたいですか。

わかりました。

お話ししましょう。

俺たちの母はいつものように本を読んでくれたんだ、一日二冊から三冊ぐらいのペースで、絵本などの簡単な薄い本から、児童文学などの少し分厚い本、そんな本を俺とハーマイオニーに読み聞かせてくれていたんだ。

初めのうちは良かったんだ、ハーマイオニーは、目をキラキラさせて、これは何？

なんでこんなことしたの？

とかよく質問しながら好奇心旺盛に、本の世界の魅力をただ単純に楽しんでいた。

だけどハーマイオニーが、年を重ねるごとに、その好奇心が度を越してしまっただけになった。

本から得た知識を実践しようとしたり、物語に登場した何かしらのものを取りに行こうとしたり、やけに冒険に憧れるようになったりしだしたんだ。

そのたんびにうちの母は、まだ小さいからだめよと、叱りつけた。

そのたんびにハーマイオニーは、母に本を読んでもらうことをせがむようになった。

それはもう異常なほどに、寝ても覚めても、本、本、本。

幼児用のおもちゃや人形に見向きもせず、本を読んでもらうことをねだりだしたのだ。

それがあまりにもだったので、なんで？

と俺はハーマイオニーに聞いてみた。

すると、この子はなんていったと思う？

「本を読んでいる間は私はその本の中に旅立ってるの、素敵でしょ？それに、小さくても冒険に行ける方法はこれしか思いつかなかったの。」

そのハーマイオニーの答えに、僕は啞然とし、母は苦笑した。

可愛いヤツめとか、しょうがない子ねーとでもおもったのだろう。

それから、母は子供可愛さに、ためになるからと本を大量に買い、ハーマイオニーに言われるままに読み聞かせだした。

だけれど、その行為は限界に達することになった。

それからもう予想道理の展開で、ハーマイオニーの過剰な活字中毒についていけなくなった母は、限界に達し、

「もう本など見たくはないわ！」

ってな状態になってしまったのである。

といつても、一日に一冊二冊程度なら許容範囲内で、笑顔で読んでくれるのだが、それ以降は誰が泣いて叫ぼうとも読んでくれなくなり、それ以降は俺が、つたないながらも読まされるはめになったのだ。

そして、俺は今日も本と戦うのだ。

あーハーマイオニー、また本を持ってきたんだね？

そう、ハーマイオニーは、自分のお気に入りの本を沢山ソリにタイヤが付いたような玩具に乗せて、紐で引っ張り俺に「読んで、ご本読んで」とせがんできたのだ。

「あーもう、わかったよ。読めばいいんでしょ。」

そうして俺は今日もハーマイオニーと一緒にソファアに座り、二人一緒に異世界への切符を使用するのだ。

朗読するという形で。

出発進行！

ああ、そういえばハーマイオニー？

最近はどうにか、読み書きをマスターしたおかげで、スラスラと読めるようにはなったけど、妹よ。

君は限度というものを知るといいと思うよ。

聞かないと思うけど。

そうしてまた、今日と明日が過ぎていった。

### 3話 妹と過ごす一日（後書き）

ここまで読んで下さり有難うございます。

感想や評価とても励みになります。

これからもどうぞご贖に。

ではまた次回！

#### 4話 十一歳になりました。

あー皆さんこんにちは。

俺は十一歳になりました。

そう、俺が十一歳になったんだ。

大事なことなので、以下省略

と、まあ何故こんなことを言い出したかというところ、ハリーポッターファンならなにか心当たりがありませんか？

え？

ヒントですか？

ふ、ふ、ふ

しょうがないですねー

十一歳これがヒントです。

この世界において、この歳で特別なある才能を持ったもののみが手にすることが出来る何かには心当たりはありませんか？

答えは………ホグワーツの入学案内です。

と、いうことで俺のところにも………。

俺のところにも……。

来ませんでした。

な・ぜ・だー！

俺は楽しみで楽しみで、何回も何回もポストに毎朝確認しに行っ  
たんですよ！

学校帰りにも、もちろん確認しに行ったりしたんです！

そ・れ・な・の・に、ホグワーツの入学案内どころか俺宛のダイレ  
クトメールすら来てませんでした。

鬱だ死のう。

アテムはいじけて部屋の隅に移動した。

「あーあー何故来ないのー。手紙ーあーあー手紙ー」

とアテムは意味のわからない歌をうたい、虚しさを表現した。

餌を上げますか？

ハーマイオニー？

こ、これは餌じゃないもん！

「ハーマイオニー？」

いじけるアテムの目の前にはいつのまにか義妹であるハーマイオニーが、餌を持って、失礼。

何やら頬を染め、もじもじとしながら、とあるあるものをもってアテムの目の前に佇んでいた。

彼女はいじけるアテムに、そのとあるモノを差し出した。

「え、これ、くれるの？」

アテムの顔が、ハーマイオニーに渡されたものによって大きく変わる。

それは驚き、そして困惑。

そう、彼女が渡したものの、それは、手紙であったのだ。

何故俺に？

アテムはそう思った。

だが、この疑問は受け取った手紙の内容によって、無意味と化した。

なんて書いてくれていたと思う？

もう一人で十分文字が買えるようになった小さい手で、心を込めて、丁寧な字で、こう書かれていた。

「おにいちゃん。大好き！元気になってね。」

これは、嬉しすぎるじゃないか。

涙が出ちゃうじゃないか〜

アテムはハーマイオニーの気遣いに感謝し、感動してポロポロと涙を流した。

うん、もうホグワーツとか、ホグワーツとかどうでもいいよね？

うん、いろいろなかったことにしよう。そうしよう。

そうして、アテムは悟りを開いたかのようにして、物事を吹っ切り、もらった手紙を一生の宝にすることをハーマイオニーに誓った。

そんなアテムを見て、ハーマイオニーは、「おおげさだよー」とあわあわし、また書いてあげるから、一生とかめ！とか恥ずかしようにアテムに抗議した。

きっと、ハーマイオニーなりにアテムを励ましたい、ただそれだけだっただけなのだろうが、アテムにとって、もらった手紙は彼の一生において色々と選択を示す機会であったのだ。

その理由は至って簡単。

原作に関われないって、一生に関わる問題だろう？

ということだった。

といっても、このアテム、思いもがけないところから原作という物

語に介入していくのだが、それはまだ本人のあずかり知らぬところ、  
それまでは、平和というものをかみしめておくがいいさ、と思う私  
であつた。

私とは誰だつて？それは聞かぬがお約束。

4話 十一歳になりました。(後書き)

ここまで読んで下さり有難うございます。

感想や評価有難うございます。

この場を借りて御礼申します。

あともう少しで原作に入ります。

ではまた次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3305v/>

---

俺はあいつの義理の兄。

2011年8月21日22時39分発行